



TITLE:

天文語彙：天界第十一號附錄

AUTHOR(S):

海老, 恒治

CITATION:

海老, 恒治. 天文語彙：天界第十一號附錄. 天界 1921, 1(11): 33-36

ISSUE DATE:

1921-09-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/159613>

RIGHT:

天界第十一號附錄(大正九年十二月廿四日第三種郵便物認可)
(大正十年九月廿四日印刷同二十五日發行)

天文語彙

海老恒治編

(その部……續々)

さよくさより極距離(Polar Distance)。地球上の北極或は南極から或星迄の角距離を云ふ。普通は北極距離(North Polar Distance 或は略して N.P.D.)が用ゐられる。

さよくこり極光(Aurorae)。オーロラを見よ。

さよくじく極軸(Polar Axis)。赤道儀式望遠鏡を支へた軸の中で地球の廻轉軸に平行したものを極軸と云ふ。

さよくせい極星(Pole Star)。地球上に於て極に近く目印になる星を云ふ。今日北極の近所にある小熊座**ア**星は所謂北極星と呼ばれて頗る便利な星である。南極には此の種の星が無い。今より四千年前は龍座**ア**星が北極星であつた。

さよくちよくけい極直徑(Polar Diameter)。遊星體の

兩極の方向に測つた直徑を云ふ。遊星は何れも、偏平楕圓體であるから、極直徑が赤道直徑よりも短い。

さよくのばんにん極の番人(Guards of the Pole)。小熊座**ベ**星と**ガ**星とを云ふ俗稱。

さよしちようざ巨嘴鳥座(Toucan)。バイエルが發明した南天の星座で鶴座の南にあつて毎年十一月南中する。但し我國では見えない。**ア**星が三等級其他皆微光。第四七番は肉眼でも見える程度の光であるが望遠鏡では立派な星團である事が解る。

さよしやざ馭者座(Auriga)。北天トレミー星座の一人で、ペルシウス、牡牛雙子諸星座の間にある。冬天を飾る美はしいものゝ一つである。**ア**星はカペラと云ひ太陽種の一等星である。**アペテイ**四星は牡牛座の**ベ**星と共に可成り好い五角形を作つて居る。**テ**星の南に M 三七番と云ふ星團がある。又牡牛座**ベ**星(之は又馭者座**ガ**星とも云ふ)の北に一八九二年新星が表はれた。**エフ**星は有名な變光星である。

さよしやざしんせい馭者座新星(Nova Aurigae)。一

八九二年一月二十三日英人アンダーソン (T. Anderson) が馭者座の南端に發見したものであるが。ハーヴアード寫眞検査の結果此星は其前年末既に四等星に輝いて居つたと知れた。光はそれ以上増加せず三月の中頃から急に衰えて四月の末には全く見えなくなつた。此の星は發見後スペクトルの觀測が盛んに行はれ其結果新星獨特の輝線暗線而立した有様が始めて明瞭に認められた。近年有名な新星の一である。

きやうとだいがくてんもんだい京都大學天文臺。京都帝國大學理學部宇宙物理學教室の附屬で、明治四十三年七時赤道儀が設備せられたのを始めとし其後リーフレルの標準時計、ザートリユースの太陽鏡ブレンシャールの十時反射鏡等が漸時加えられた始めから新城博士が主任である。大正八年佐々木氏四吋赤道儀を以つて本邦最初の彗星を發見し次いで又翌年百濟氏本邦第二回の彗星發見をなした**きよりのたに**距離の單位 (Unit of Distance) 天文學上の距離は左の如き、種々の單位に由つて表はされる。

地球赤道半經(六三七八浬)太陽系の諸天體の大小等に用ゐられる。

天文單位 (Astronomical Unit) (一五〇〇〇萬浬) 太陽系内の天體相互の距離を云ふ時に用う。

パーセック (Parsec) 年週視差一秒の距離。二〇六二六五天文單位、又は三・二六光年に相當す之は恒星相互の距離を表はすに用ゐるものである。

光年 (Light Year) 光が一年間に通過する距離、六二四〇〇天文單位、之は恒星相互の距離を表はす通俗單位である。

ざんが 銀河あまのがはを見よ。

ざんがけん銀河圈 (Galactic Circle)。銀河の平均位置に沿ふた大圓で赤道とは鷲座及び一角獸座で交はりその傾斜角度六二度、之を標準として銀經銀緯を測る。

キーラー (J. E. Keeler)。米國リック天文臺長。始めアレゲニー天文臺に於てラングレー教授の指導の下に主としてスペクトルの研究をなした。一八八六年以來リック天文臺で同じく天體のスペクトル

ω φ χ ϑ υ τ σ ρ π ο ξ ς 文^キ 文^リ 文^シ 文^ヤ
 オメガ プシ ヒ フイ ウプシ ロン シグマ タウ ビ オミクロン クシ ヌ 發音

後を繼いでアレグニー天文臺長となり、一八九八年更に又リツクに呼ばれて其臺長となり専ら寫眞觀測をなした。(一八五七年生、一九〇〇年死)

キルヒホッフ (G. R. Kirchhoff) 。獨逸の物理學者。

た。
(一八八二—一八八四年死)

觀測は殆んど不可能である。

牡牛座と略一致して居つたけれど歳差のために漸

時今日の如く異動してしまつた。今日金牛宮の原點は牡羊座の西端にある。

さんじつてん近日點(Perihelion)。遊星や彗星の軌道上に於て太陽に最も近い點を云ふ。

さんせい金星(Venus)。地球の内側を廻る大遊星の一つ。支那名太白。太陽よりの平均距離〇・七二三(天文單位)。公轉周期二二四・七日。離心率〇・〇〇七だから軌道は頗る圓に近い。我地球との會合周期五八四日で其半は宵の明星其他は曉の明星である。最大隔離は下合の前後三十日余に起り太陽より四五度以上離れる。又光輝頗る強大で、負四等にも達する事があり晝間肉眼で容易に認められる。金星の直徑は我地球の九割七步で下合の近所では視半徑六〇秒を超える。全質量も地球に近く、密度も水の五倍ある。金星の自轉周期についてはカツシニの二四時間説とスキアバレリの二二五日説とあるが近頃又ピツケリングは六八時間説を出して居る。要するに望遠鏡觀測では光輝の強い割合に斑點が著しく見えないので結果は不充分である。表面のアルベードは〇・七六と云ふ高

率で殆んど雲のそれに近い。種々の事情から推して金星には濃厚な雰圍氣があるらしく現に水蒸氣の存在が確められて居る。

衛星は未だ一つも認められてゐない。

さんせいのにけいぐわ金星の經過(Transit of Venus)。

太陽、金星、地球の三天體が一直線上に來るため我地球から見て居れば金星が太陽の表面を通過する様に見える現象を云ふ。二四三年毎に四回宛起り時期は六月の始めか十二月の始めに限られる。

近代の現象は

一五八八年六月二日

一七六一一年六月六日

一五二六年六月一日

一七六九年六月三日

一六三一年十二月七日

一八七四年十二月九日

一六三九年十二月四日

一八八二年十二月九日

次ぎは二〇〇四年六月八日及び二〇一二年六月六日の筈である。ハレーは此の金星經過を觀測して太陽の視差を計算する事が出來ると主張した爲め一七六一年以來諸學者は此觀測を行ひ來つた。

さんせいてん近星點(Periastron)。連星の軌道上に於て相互の距離が最小の場所を云ふ。(連星を見よ)